

アルプス 白ネギ 栽培ごよみ

2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
○	●	△	○								
播種・育苗			定植		土寄せ					収穫・調整	
			病害虫防除		萎凋病・疫病・軟腐病			さび病			
						スリップス・ハモグリバエ					

1. 播 種

■10aあたり必要資材（畦幅1.2mの場合）

チェーンポットCP303、育苗箱、底敷紙	55枚ずつ
培 養 土	45%詰め8袋
コ ー ト 種 子	約44,000粒

(1) 播種作業

- 均一に培養土を詰める（緑のポットは、培養土が少なくなりやすいので注意）。
- 1ポットあたり3粒ずつ播種する。
- 均一に覆土する（チェーンポットと育苗箱のすき間にもしっかり土を詰める）。
- たっぷり均一にかん水する（育苗箱1枚あたり2%が目安）。

(2) 出芽管理

I) 育苗器を利用する場合

- 20～25℃で4～5日、育苗器に入れる。
- 育苗箱を直接重ねた場合、芽傷みを防ぐため、出芽直前にハウスに搬出する。
- 育苗箱1枚ごとに空箱をかぶせるなどすると、芽傷みを防ぐことができる。

※3月の育苗器使用は温度管理に注意。

II) 育苗器を利用しない場合

- ハウス内で、べたがけ資材で被覆する。
- 出芽が見られたらべたがけ資材を除去する。

2. 育 苗

(1) かん水

- かん水は午前中に行い、夜間は過湿にならないようにする。
- 晴天時は、1日1回行い、曇天時・雨天時は乾いていれば行う。

(2) 温度管理

- 昼間20～25℃、夜間10℃を目安に管理する（30℃以上にならないように注意する）。

3. ほ場準備

- 排水のよいほ場を選ぶ。
- 病害虫の発生が増えることなどから、できるだけ連作は避ける。

- 定植前（できれば前年）に、額縁排水溝を設置する。
- できるだけ深く、細かく耕起・砕土する。
- 基肥（側条施用の場合はなっちゃん（又は、あきちゃん）を除く）を全面に施用し、耕起する。

■基肥の目安(kg/10a)

	基肥一発肥料の場合		基肥+追肥体系の場合
	植溝施用	全層施用	
完 熟 堆 肥	3000	3000	3000
貝 化 石	200	200	200
よ う り ん	60	60	60
なっちゃん又はあきちゃん	75	105	-
そ さい S 1 号	-	-	20

4. 定 植

(1) 定植苗の目安

- 育苗期間 2月まき：50～60日 3月まき：40～50日
- 草丈15～20cm、葉数2枚程度で定植する。
- 定植が遅れると、根が絡んで定植しにくくなるとともに、活着不良となるので注意する。

(2) 定植作業

- 植付姿勢をよくするため、苗の葉を10～15cmに切り揃える。
- 定植直前に苗にたっぷりかん水するとともに、萎凋病対策としてトリフミン水和剤（200倍）を育苗箱1枚あたり1%かん注する。
- 定植当日に1.1～1.2mの畦幅で、植溝（深さ10～15cm）を掘る。
※植溝はしっかり額縁排水溝につなぐ。
※深いところの砕土が不十分で、植溝を掘ったとき、大きな土塊が掘り上がった場合は、削り込み時に曲がりの原因となるので、耕起・砕土をやり直す。
- なっちゃん（又は、あきちゃん）を植溝施用する場合、植溝になっちゃん（又は、あきちゃん）を100mあたり9kg散布する。
- ひっぱりくんを使って定植する。
- 覆土が不十分で、チェーンポットが土から見えている場合は必ず手直しをする。なっちゃん（又は、あきちゃん）が土からみえている場合も覆土する。



- 活着肥としてやさい磷加安S540を株元に100mあたり1～2kg施用する。
- ハモグリバエなどの予防として殺虫剤を株元に散布する。
- 雑草対策としてトレファノサイド乳剤（又はトレファノサイド粒剤）を散布する。

病害虫防除

- 薬液がつきにくいので、展着剤を加える（ハイテンパワーなど）
- 水和剤や乳剤は、葉の全体に薬液がかかるようしっかり散布する。
- 出荷時に病虫害が残らないよう、最終土寄せ以降の防除を徹底する。
- 農業の使用量（倍率）、使用時期、使用回数を確認し、しっかり守る。

(1) 疫病、べと病、軟腐病

- 土壌で感染する病害であり、多雨や高温期の土寄せ・追肥で被害が拡大する。
- 6月上旬にリドミルMZ水和剤（ジマンダイセン水和剤とあわせて3回）を散布する。
- 6月下旬、7月下旬の土寄せ時にオリゼメート粒剤を株元散布し、土寄せする。

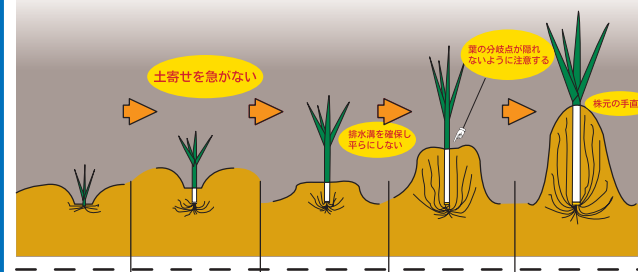
(2) さび病

- 9月以降に発生が増えるため、ジマンダイセン水和剤などにより予防する。
- 発生が見られたら、ラリー水和剤、アミスター20フロアブルなどで防除する。

(3) ハモグリバエ・スリップス

- 梅雨明け以降に発生が増え、収穫期に入っても被害が目立つ。
- アグロスリン乳剤、ダントツ水溶性などで防除する。
- 土寄せ時にジメトエート粒剤やダントツ粒剤などを株元散布してもよい。

5. 土寄せ、追肥



定植 ← 35～40日 → 土寄せ ← 20～30日 → 土寄せ ← 20～30日 → 土寄せ ← 20～30日 → 土寄せ
(削り込み) (仕上げ)

(1) 削り込み、土寄せ

- 最初の削り込みは定植後35～40日で行い、その後の土寄せは、生育にあわせて20～30日間隔で4～5回行う。
- 土寄せは生育の早い株にあわせて行わない（遅い株は、ますます細くなる）。
- 途中の土寄せは、株元まで土を寄せず、葉の分岐点が隠れないように注意し、土の上に葉が4枚以上出るようにする。

(2) 追肥

- 基肥でそさいS1号を用いた場合、削り込みや土寄せ時にやさい磷加安S540を20kg/10a追肥する。
- 夏季の無理な土寄せ、多量の追肥は、軟腐病などの発生の原因となるので控える。

(3) 最終土寄せ

収穫時期	軟白必要日数	収穫期間の目安
8月どり	20日	10日
9月どり	25日	10日
10～11月どり	30～35日	15～20日

- 仕上げの最終土寄せは、上の表を参考に、出荷量に応じて計画的に行う。
- 根元から33cm（8月～9月に出荷するものは30cm）の土寄せ量をしっかり確保する。
- 必ず手直しを行い、ネギとネギの隙間に十分土を寄せ、土の沈降によるボケの発生を防ぐ。

6. 収穫・調整

- 試し掘りをして、軟白長が30cm以上（8～9月に出荷するものは27cm）確保したことを確認してから収穫する。
- 下の図のように根葉切り・皮むきし、富山県標準出荷規格にしたがい、選別・結束して出荷する。

